

# Wesley Hall News



2002年3月 大学卒業式

青山学院スクール・モットー  
地の塩、世の光  
The Salt of the Earth, The Light of the World  
(新約聖書 マタイによる福音書 第5章13~16節より)

No. 83

2005. 3. 7

説教 自分らしく生きる —イザヤ書43章4節— 鳩田 順好 ..... 2

## 特集 卒業

- 参観を通して
  - 大きな力で前に進む
  - 中等部で得たもの
  - 道
  - かけがえのない存在
  - 卒業にあたって
  - キリスト教図書紹介 子どもに語る聖書
  - 想い出あれこれ
  - 中等部讃歌「あばた」も「えくぼ」
  - 青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その10
  - 私の教会 インマヌエル高津キリスト教会
  - 宗教センターだより
- |                |
|----------------|
| 佐藤 麻里 ..... 4  |
| 石田 彩子 ..... 4  |
| ..... 5        |
| 橋本 弘美 ..... 5  |
| 新名 陽子 ..... 6  |
| 宍戸 ハンナ ..... 6 |
| 遠藤久美子 ..... 7  |
| 樋口 善一 ..... 8  |
| 布施 英俊 ..... 10 |
| 氣賀 健生 ..... 12 |
| 善如寺亜矢 ..... 14 |
| ..... 15       |

## 説 教

# 「自分らしく生きる」

イザヤ書 43章4節

嶋田 順好

大学宗教主任



3月、4月は卒業入学シーズンですから、一年の中でも最も「おめでとう」という言葉が交わされる季節ではないでしょうか。「おめでとう」という言葉は、元々は「愛である」という言葉と、「はなはだしく」という意味を持つ「いたく」という副詞が合わさってできた言葉だそうです。そうだとすると「おめでとう」という言葉は、心いっぱいの愛を込めた祝福の挨拶、喜びの挨拶ということになります。そんなことを知らされるとなかなか素敵な挨拶の言葉だと、皆さんもお思いになるのではないでしょうか。

しかしながら、この季節、だれしもが得意満面に喜びに浸っているわけではありません。この時期特有の悲しみや苦しみ、憂鬱があるのです。入学試験や就職試験にチャレンジした皆さんのなかには、第一志望に決まり、深い喜びに満たされている人もいれば、他方では、第一志望に行けなくて少々がっかりしている人もいることでしょう。ここにいる皆が皆、必ずしも自分の願った通りの進路に進むことができたとは思っていないのです。したがって、皆さんの中に、これこそがあなたの人生だ、あなたの歩む道だと言われても、もう一つ納得がいかず、正直な胸の内を打ち明けて言えば、こんなはずではなかつたのにとの不満や苛立ちに似た思いを抱いている人も少なからずいるのではないか。

かつて私は、天才に憧れたことがあります。「ああ、AINシュタインになれたら、モーツアルトになれたら、ピカソになれたらどんなによいことだろう。運動能力もぱつとしな

いし、記憶力も悪い、スタイルもよくなければ、人柄もよくない。学校の先生たちは、『天才でなくたって最後はこつこつと努力する者が人生の勝利者だ』と言う。でも、その努力ができる、できないも才能のうちではないか。僕はこつこつ努力することが一番苦手なんだ。ああ、なんて自分は惨めな存在なんだろう』という具合です。皆さんはこんな思いを抱いたことはないでしょうか。

時として私たちは自己嫌悪に陥ることがあるし、自分を受け入れられなくなる時があるし、自分で自分で余してしまってあるのです。そこでも、どうして僕は、私は、あの人や、この人のように能力もあり、性格も素晴らしい生まれて来なかつたのだろうと、自分で自分を恨めしく思う気持ちに捉えられるのです。しまいにはやけのやんばちになって、こんな私に生んだおとうさんが悪い、おかあさんが悪いと思つたりさえし始めます。とかく私たちは、マイナスな状態を、まわりの人々や生い立ちのせいにして、正面から自分の問題として受け止めようとしたところがあるのではないか。

しかし、イザヤ書43章4節には「わたしの目にはあなたは価高く、貴いと言われています。他人が何を言おうと、自分が自分をどう思おうと、神の眼差しにおいては、常にこの「私」は貴い存在とされているのです。他人の評価、自分の身勝手な自己評価を越え、神の愛のなかで価高い者とされている自分を見出し、本当に自分らしい人生を歩んでいたら、どんなに幸いなことでしょう。

北海道家庭学校の校長をしていた谷昌恒先生が、『いま、教育に欠けているもの』という講演のなかで次のようなことを仰っておられます。

「生きるということは不平等に耐えることと言えば、いかにも非情な主張のように受け取られるかもしれません。しかし、不平等に耐えるということは、実は、人間は一人一人違うのだという事実を、そのまま受け入れることなのです。私たちの生きる覚悟は、その時に定まるのです。生きる勇気も、その時に生まれるので。自分を生かしていこう、そういう励みも、そのときに湧くのです」。

平和で、豊かな時代に、何と不満が、鬱々とした気分が満ちていることでしょうか。全てが許されていると言ってもいいほどの時代の中にはあって、特に若い人たちのなかに底知れない巨大な鬱屈した気分が存在しているように思えなりません。「むかつく、いらつく、たるい」そんな気分が覆っています。そして、ほんの些細なことでも切れて、人を傷つける少年犯罪が絶えません。忍耐すること、我慢することが出来なくなっているのです。思うようにならない人生の中で、周りの人にも、自分にも苛立っている、腹を立てているのです。語弊を恐れず言えば、そのような出来事の背景には不平等に耐えることを学ばないで、皆、同じでなければ我慢ができず、皆、平等ということをきわめて表面的にしか教わってこなかったことが原因の一つになってはいないでしょうか。もちろん、民主主義社会では、法の下の平等を高らかに告げます。それは基本的人権として重んじられなければなりません。しかし、だから何でも平等かと言えば決してそんなことはありません。その人生の真理はもっと率直に、端的に私たちはわきまえていなければならぬことだと思うのです。

斎藤環さんという精神科のお医者さんが、中学生や高校生の登校拒否だけでなく、サラリーマンのなかにも出社拒否をする人々が増えている問題の根源には、「成長とともに、さまざまな他人との関わりを通じて、『自分が万能ではないこと』を受け入れ」ることを学習していく

いことにあると、述べています。

人生は、そう簡単に自分の思うようになりません。皆さんも、もし今もなお、ドラエモンのポケットを手に入れたいと願い、「どこでもドア」や「竹コプター」が手に入ったらどんなにいいことかと思っていたら、それは成熟していないということです。成長すること、大人になることは、多くの可能性の中からたった一つの可能性を選び取ることです。その選択に際し、なかなか自分の願いが叶わなくても、その運命を引き受け、耐え忍ぶ、それが大人になるということでもあるのです。あれにもなりたい、これにもなりたいと自分の思うようにならない人生をいつまでもないものねだりをして夢見ていたら、結局はモラトリアム人間になってしまうでしょう。

「わたしと小鳥とすずっと」という詩は、金子みすずさんの作品のなかでも最も有名な詩ですから、皆さんも、かつてどこかで一度は耳にしたことがあるのではないでしょうか。そこには一人一人の自分らしさを大切にすることが豊かに歌われています。

わたしが両手をひろげても  
お空はちっともとべないが、  
とべる小鳥はわたしのように、  
じべたを早くに走れない  
わたしがからだをゆすっても  
きれいな音はでないけど、  
あの鳴るすずはわたしのように  
たくさんの歌は知らないよ。  
すずっと、小鳥と、それから  
わたし、

みんなちがって、みんないい。

人は一人一人違うのです。傲慢にならず、自己卑下もせず、「わたしの目にはあなたは価高く、貴」いと仰ってくださる神の御言葉に信頼し、自分の自分らしさを存分に發揮して歩んでいくとき、誰のでもない自らの人生が輝き始めるにちがいありません。ご卒業おめでとう。主が皆さんと共にいて、人生の旅路を祝し、導いてくださいますように！！

## 特集：卒業（幼稚園）

# 「参観を通して」

佐藤 麻里

ゆり組 佐藤 宝 保護者



二月の寒い一日、私にとっては最後の保育参観がありました。楽しいお弁当のあと、子どもを追って園庭に向かった先は砂場です。男児数人で水道管の部品を埋めて作った水路に、延々と水を流したり砂をかけたりしたあとには泥水のお池ができていました。すると彼らは一斉に裸足になって、歓声とともにその泥水に入り始めたのです。ぴちゃぴちゃはねる泥水とはじける子どもの笑顔は私に寒さを忘れさせ、思わずつられて私も声をあげていました。こんなにも思う存分遊ばせて頂けるのも、あと一月余りと思うと、見慣れた光景も真冬の午後の柔らかな日差しの中でとても輝いて見えてきます。園庭の日当たりの良い一角に子どもたちが植えたチューリップの球根が芽を出し始めました。「……さむいさむいふゆでも、まけるなまけるなと、守つてくださる神さま。」子どもたちが歌っていた幼児さんびかを思い出しました。お片づけの後、先生が一人一人の足をお湯で流してくださっていました。感謝の気持ちで胸が一杯になりました。

この幼稚園での三年間に、子どもたちは神様がいつも守ってくださっていることを先生方の暖かいまなざしを通して学びました。私も一保護者として当たり前に過ごしてきた日々の生活がどんなに恵まれていたことか、ついつい御座成りになりがちの自分を省み感謝の気持ちを新たにする機会を何度も与えられました。

「わたしは植え、アポロは水を注いた。しかし、成長させてくださったのは神である。」(コリントの信徒への手紙3.6) ここまで成長させてくださった神さまに感謝致します。そして何よりもこの三年間いつも子どもたちと共にいて見守って下さった先生方、本当にありがとうございました。

## 特集：卒業（初等部）

# 「大きな力で前に進む」

石田 彩子

初等部 6年梅組



1999年4月5日月曜日、私達は、この青山学院初等部に入学しました。これからどんな生活が始まるのか、期待に胸を張らせながらも、(六年間って長いなあ)と思っていたはずです。でも、今になってみると、入学から卒業までの六年間は、とても短く感じられます。それは、一緒に卒業する、六年生のほとんどが感じている事だと思います。

私は、今までの六年間で、たくさんの仲間達と、数え切れない程の思い出を刻んできました。皆で全力を出し切った平戸、お互いが助け合う事で、苦しい事も乗り越えた洋上小学校、他学年との交わりを大切にし、共に生活する力を身につけた雪の学校。数々の思い出は、私に、どんな事も乗り越えられるような、大きな力をくれました。

そして、二年間の宗教プロジェクトの活動で、奉仕の喜びと、責任を持って仕事をするという力を身につけ、神様が、私達をどれ程愛し、恵みをお与えになつておられるかを、改めて感じさせられました。また、三年生から所属している、女子スポーツクラブでは、「根・知・和・精神」というモットーの元で、様々な事を経験し、力にしてきました。

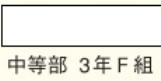
私は、「この初等部で手に入れたものは、いつか、必ず自分の力になる」そう信じています。その力をどのように利用するかは、自分次第だと思います。これからも、聖書の御言葉と、五つの約束を胸に刻んで、歩いて行きたいです。

最後になりましたが、時には厳しく、時には優しく励まし、支えて下さった、たくさんの先生方に、心から感謝いたします。

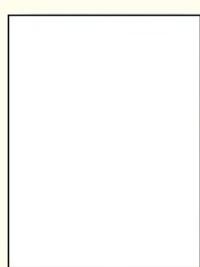
そして、新たな気持ちで中等部へ進学し、これから道を歩んでいきたいです。

## 特集：卒業（中等部）

# 「中等部で得たもの」



中等部 3年 F組



## 特集：卒業（高等部）

# 「道」

橋本 弘美

高等部 3年



ある先生が、「学校に来るのはただ勉強するためではなく、むしろ多くの人とふれ合うためだ。」と仰っていましたが、私はこの言葉がとても印象深く残っています。この学校に入学できることによって、私は多くの人と知り合うことができました。

この青山学院に在学している殆どの人は、少なくとも一回は入学試験を経験したことがあることだと思います。もしもその時、合格できていなかつたのならば、今学校で関係を持つことができた多くの人とは、人生の中で一度も巡り合わないままだつでしょう。こう考えるとこの出会いの一つ一つがとても貴重で面白いものだと思えます。

人間は他の人と触れ合することで、成長することができると思います。意見を交換し合うことによって自分ひとりでは考えもしなかつたようなことを発見したり、お互いの意見を組み合わせることでより良いものが見つかったりする場合もあります。それだけでなく、思いやりの心や感性などの成長にも他人とのふれ合いが必要不可欠です。

私は中学生という大きな意味を持つこの時期に、この学校で学ぶことができたことを感謝しています。中等部の教育目標の中に、「個性を尊重して～、自主性を育てる。」という一文がありますが、生徒を皆同じように「勉強ができるいい子」という製品に仕立て上げるだけの学校で学んでいたとしたら、他人と深く関わることもせず、何も考えずに、ただ漠然と生活するだけだったと思います。心理学者B・F・スキナーによると、「教育とは学んだことがすべて忘れ去られた後に残る何か。」だそうです。その何かをこの学校で多く手に入れることができました。

最後にこのような学びの場を提供してくださった主と先生方に謝意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

「あなた方は世の光である」(マタイ5:14)

突然ですが、皆さんには「バミる」という言葉をご存知ですか。これは演劇などの舞台用語で「バミリテープを貼る」つまり、立ち位置などの目印をおくという意味です。私は小学校の時からこのバミリテープにはお世話になってきました。練習中は繰り返し立ち位置を確認し、体に動きをしみこめます。そして本番を迎えると、テープを頼らずに上を向いて自分を信じて動くのです。

これは学校生活においても同様のことが言えると思います。高等部までの生活は、学校という型の中で作られたものだと考えるとすると、当たり前として過ごしてきた毎日は言わば「バミられた道筋」をひたすら歩んできたとも言えるのではないでしょうか。またそれは決して悪いことではなく、私達が大人へと成長していく上で必要な過程です。そして、卒業という大きな分岐点に立つた今、私はバミリテープのない道を自ら切り開いていかなければなりません。

スクールモットーでもある“あなた方は世の光である”という呼びかけは、非常に曖昧で抽象的かもしれません。しかし、聖句にあるようにもし自分が光りであるならば、眩しいほどに輝く光とはいかなくても、周囲を明るく照らすことのできる温かい光でありたいと私は思います。この高等部での3年間は私にとって本当に充実したものでした。多くの人に支えられ、たくさんの事を学び、思う存分にこの生活を楽しんできました。そして今、かけがえのない最高のクラスメイトと共に高等部を卒業できる事がとても幸せです。

戯曲作家W.シェークスピアは言いました、「全ての人間は役者である」と。これからは人生という大きな舞台に立つ一人の役者として、新たな一步を踏み出していきたいと思います。3年間、本当にありがとうございました。

## 特集：卒業（短大）

# 「かけがえのない存在」

新名 陽子

女子短期大学  
児童教育学科 2年



この学校に2年間通うことによって、学問を通して新しい体験や知識を得ること以外にも、多くのことを学ぶことができた。特に、キリスト教であるこの学校で神様という存在が自分の中でどれだけ大きかったかをあらためて知った。

1年の時にハンドベル・クワイアに入ることによって宗教活動に参加するようになり、2年になってからはゴスペルグループにも参加するようになった。私は高校までキリスト教学校に通っていたのだが、そこで感じていたのと同じような温かさを、宗教活動に参加している人たちからも感じることができた。特にハンドベルの活動を通して次の聖句を実感した。「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つである。すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というのがあるのでしょうか。体の中でほかより弱く見える部分が、かえって必要なのです」(コリントの信徒への手紙ー12:12~36)。ハンドベルは、たくさんの音を皆が持つことによって1つの曲ができる。だが、皆が同じ音を持っていては曲を作り上げることができない。出番の少ない音も大切なのである。私たち一人一人も神様から見れば大切な存在であり、愛されているのだということを実感した。ゴスペル活動でも、神様に対して賛美していると、いつの間にか心から歌っている自分を発見する。少し落ち込んでいる時でも、歌うことによって励まされることがある。どこに行っても神様とのつながりがあることを知り、自分にとってかけがえのない存在であることを知ったのだ。この学校で2年間学べて本当によかつたと思っている。

## 特集：卒業（大学）

# 「卒業にあたって」

宍戸 ハンナ

大学  
経済学部 4年



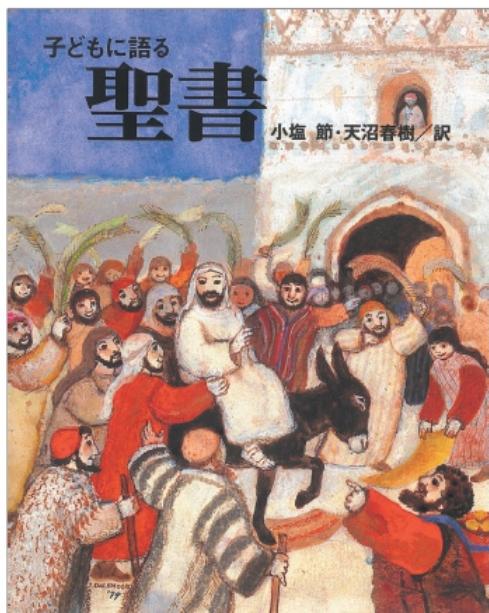
「最も素晴らしいことは、神が私達と共にいてくださることだ。」という最後の言葉を周囲の人々に語り残しジョン・ウエスレーは人生を閉じたそうです。青山学院大学を卒業するにあたって、今ここで4年間の思い出を記す機会を感謝します。ただこの紙面に全てを著すのは困難です。思い出すと入学してから家族の元を離れ今はなき厚木キャンパスに2時間かけて通学したこと、高校時代の親友が亡くなったこと、あまり頑張ったとはいえない勉強のこと、多くのクリスチヤンの友人と出会えた青山キリスト教学生会での交わり、3年次には役員として関わったこと、就職活動をしたことなど様々なことが目に浮かびます。私にとって素晴らしい4年間でしたが、同じくらい辛いことも多かったです。主は私に耐えられない試練はお与えにはならない、全ての業は神様によってなされ、私は守られていると信じて、これから青学を卒業しようとしています。今すぐ神様の御言葉を伝える者になりたいと思い、青学を退学しようと決心した日から4年間という時間を与えられ、その他にも様々な経験を大学内外で与えられました。多くの人の交わりも与えられました。「自分が～したい。」というのではなく、神から与えられている「すべきこと」は何か、「私の神」ではなく、「神にとっての私」という軸への転換、4年間自分一人で生きてきたのではなく、そこには神様の愛の御業が働かれ、環境を与えられ、人を与えられたことに感謝しきれません。この4年間のときを一生涯の宝にして、残された時間を神様に仕える者として過ごしたいと願います。青学で出会えたこの「大いに獲得し、大いに節約し、大いに捧げなさい。」の言葉を大切にしたいです。

## 『子どもに語る聖書』 ドイツ・カトリック教会司教會議編

小塩 節・天沼春樹 訳（こぐま社）

遠藤 久美子

初等部教諭



『声にして読みたい日本語』（齋藤孝著、草思社）という本が、2001年に発行されました。大変な売れ行きで、私のよく行く本屋では、ごく最近まで「今週のベストセラー」の棚に並んでいました。古典から現代の文や詩歌、お経や落語まで、声に出して読むにふさわしいなじみの文が、ずらつと並んでいます。声にしてみると目で見ている時より、その文が生き生きと迫つて来て、言葉が力を持つことに着目したのが、この本の爆発的な売れ行きの原因でしょう。

私が『子どもに語る聖書』に、教文館の書棚で巡り合った時、上記の「声にして読みたい日本語」を思い出しました。この本は、ドイツ・カトリック教会司教會議が子どものために、聖書の大切なところを抜き出して、小塩節、天沼春樹両先生が中心になつた翻訳委員会が、ですます調のわかりやすい口語に直したものです。初めの

部分を抜き書きしてみます。

「はじめに、神さまは天と地をおつくりになりました。

大地はまだ、かたちがなく、

くらやみがこの世の最初の水の上にあり、神さまの息である靈だけが、その上をただよっていました。」

訳文は、節の区切りは表示せず、行替えで示しています。そして内容ごとに、「罪」「罰」等の、わかりやすい小見出しがついていて、見出しを読んでいくだけでも、聖書は何を語っている本なのか、自然にわかってきます。

殆どのページには、温かみのある挿絵がついていて、読み進めることを楽しくしてくれます。色彩も抜群にきれいで。巻末には、度々出てくる用語、人名、地名（「アーメン」「アダム」「安息日」等）の解説も出ていて、小辞典のようになっています。そこにも、考証の確かな絵がついていて、理解を助けてくれます。

初等部では、3年生で「主の祈り」4年生で「詩篇23篇」を、全員が暗唱しています。少しづつわかりにくいところがあつても、声に出していると、その意味が伝わってきます。そしていつまでも、心に残ります。

私は今この本を、目で読むだけでなく、少しづつ声にして読んでいます。聖書のみ言葉は、こうやって読むものなんだ、納得させられます。子どもでもわかる、そして大人にもストレートに心に響く、聖書の力が迫つて来る本です。ぜひ手に取つてみてください。

# 「想い出あれこれ」

樋口 善一

初等部部長



青山学院に奉職して40余年、中等部からの通学期間を加算すると50年を超える。50年前の渋谷は、2階建ての木造店舗や家屋が建ち並ぶ、落ち着いた雰囲気の街だった。しかし、東京でオリンピックが開催されることが決定されて以後、渋谷の街は1日も休むことなく、どこかが必ず掘り返され工事車輌が働き蟻のように動き回り、今もなお渋谷、青山は大きく変化し続けている。

私が中等部に入学した昭和27年頃の青山学院は、正門を入ると、両側に現在の大学1号館、2号館、その先左側に本部、右側に中にはいると鉄骨がむき出しになった講堂があり、正門の正面は間島記念館、その左は米山講堂と初等部、間島の右側に短大、その奥に高等部があった。大学1号館の左には大学のグラウンドがあり、現在の記念館、青学会館のあたりには、プールとジムと馬場があった。初等部のグラウンドの先は一段高くなり、中等部のグラウンドと続き、右側が高等部のグラウンドになっていた。グラウンドも今のようには、ほとんど管理されておらず、夏草やつめ草が我がもの顔にのさばっていた。学院全体がのんびりとしたのどかな雰囲気の中で時間もゆっくりと流れていたように思える。

そのころ中等部のグラウンドには、一匹の山羊がいてみんなのアイドルになっていたのが思い出される。この山羊は、中等部の用務員のおじさんが飼っていた山羊で、臭いミルクをご馳走になった記憶がある。青山学院には多くの個性豊かな先生方がいらっしゃるが、中等部で生物を担当されていた田渕先生は印象に残っているおひとりだ。アサガオの研究で世界的に有名

な先生である田渕先生を私たちは、タブチン、タブチンと言っていた。油断していると突然耳に噛みつく癖のある先生だった。中等部の講堂は現在の首都高4号線の辺りにあって毎日の礼拝が行われていた。礼拝は、教職員は壇上に生徒は下に向き合う形であった。タブチンはいつも最前列におられたが、讃美歌を歌っている時に口が動いているのを見たことがなかった。歌わないなら壇上にあがらなければ良いのにと思ったものだった。いちばん印象に残っているのは、初めての授業の時、ノート1頁全部に開花した桜の花を1つ大きく描いて、2頁目に10項目の授業心得を書いたことだ。どんな内容であったかは忘れてしまったが、10項目の第1項「哲人の如く考えましょう。」だけは鮮明に憶えている。

昭和30年、なんとか高等部に進学することができた。高等部では、宗教部の活動をとおして橋本ナホ先生、藤村精一先生と出会い信仰に導かれただけではなく、家庭の事情によって経済的な苦境にたったとき、藤尾先生、綿引先生、宇佐見先生など多くの先生方が、親身になって支えてくださった愛と恩は感謝してもしきれないものがある。私の高等部時代の歩みは言葉では言い尽くせないほどの大きな財産となっている。

昭和33年、大学時代の想い出は高等部OBとして高柳先生とともに高等部キャラバンを組織して関東や東北の教会で「子ども会」をして廻ったことだ。東方敬信学院宗教部長も参加した一人であった。キャラバンの特徴は、自給自足を原則に鍋釜を持ち、紙芝居、人形劇の舞台、スライドプロジェクター、ペーパーサート等を持ってローカル線

やバスで移動することであった。4月から準備を始め、人形劇の舞台、人形、ペーパーサートのすべてが自作であった。人形劇の出し物として、「3匹の子ぶた」「靴屋のマルチン」の台本も書き下ろした。会場で使用するアンプも秋葉原で部品を買い集めて自作した。

訪問先の教会に着くとまず、食材を調達するグループと子ども会の準備をするグループに分かれて作業をすることから始まる。この時代は、スーパーもコンビニも無かつたので食材の調達には、かなりの時間がかかった。お米の調達も困難であったので袋に入れて持ち歩いた記憶がある。

キャラバンをとおしていろいろな教会があるのを知ることができた。立派な会堂を備えた教会もあり、民家の一部を会堂とする一方、教会学校は地域の公民館を借りている例もあった。また、教会に対する地域社会の反応もいろいろであった。千葉県のある教会で木の上にスピーカーをセットしてチャイムのテープを流して、子ども会のPRをしていると、町内会の顔役がうるさいといって怒鳴り込んできることもあった。

大学の卒業が近づいた昭和37年、キリスト教学校教育同盟から、横浜の某キリスト教小学校で教員の募集があるがという案内があった。私はキリスト教学校へ赴任したいと考えていたので、よろしくお願ひしたいと意志を伝えた。先方の学校との面接日も決まり校長先生との面談を待つばかりになっていた。ところが、面接日の数日前に青山学院初等部から至急面接したいとの連絡があり、大学の古銭良一郎先生に相談した結果、母校でもありせっかくのチャンスなので積極的に考えてみればとのアドバイスを得て面接の結果、急遽初等部に奉職することが決まった。後日談になるが、キ同盟の会等で先方校の校長先生にお会いする機会があると、なにげない雑談の中に本来ならば、私の学校に赴任する筈であったのにという言葉を聞くたびに謝らざるを得なかつた。

昭和37年4月に初等部に赴任した。当時の部長は、脇屋義人先生であった。奉職していきなり1年生の担任を仰せつかつた。学年のメンバーは水野房一先生、奥沢千穂子先生であった。水野先生の発案で、この年の夏に1年生としては初めて

の「なかよしキャンプ」を実施した。「若い日にあなたの造り主をおぼえなさい」という主題で初等部に1泊する形で実施した。開会礼拝で聖書のみ言葉に心をかたむけ、キャンプソングを大きな声で歌い、午後は、水遊びといつてもプールがあるわけではないので、水道の蛇口からホースで水をかけ合う単純な遊びだった。しかし、子どもたちにとっては、十分に楽しい強烈な印象を与えた遊びであり、このときの情景や歓声が昨日のように思い出される。夜は木造校舎の前のグラウンドでキャンプファイヤ。人食いインディアンが現れ子どもたちは悲鳴をあげて逃げ回っていた。最後にみんなで花火を楽しみ、夕べの祈りのあと床についた。といつても校舎を使ってのお泊まりなので宿泊場所は、3階の音楽室であった。寝具はレンタルを利用した。まだその頃はレンタルなどという言葉は一般化していなかったので、専ら貸し布団屋さんといっていた。当時初等部のどこの部屋にも冷房の設備はなかったので、うだるような暑さの中窓をあけて、蚊取り線香の中で一夜を過ごしたのが思い出される。

この「なかよしキャンプ」も昭和45年になって学年の行事から学校行事として位置づけられ、多くの教職員の参加をえて、現在は清里の清泉寮で新1年オリエンテーションキャンプとして宗教色の濃い2泊3日の充実したキャンプに発展している。

その他、初等部での想い出は、子どもと同じように洋上小学校、雪の学校、平戸の遠泳の他に、ランドセル廃止、通信簿廃止、学校5日制、情報室のスタート等々数々ある。これらの歩みは時代を先取りした初等部の先生方のチームによる先導思考によってもたらされたものであると確信している。

多くの若人を育み、その中の一人として私も初等部で育てられ、学院に育てられ今日に至ることができたのも神さまの大きな恵みであり、大きな財産であり、神さまに感謝すると共に私をここまで具体的に支えてくださつた方々に心からの感謝を申し上げて静かにそつと初等部を去っていきたいと願っている。

# 「中等部讃歌」

—「あばた」も「えくぼ」—

布施 英俊

高中部副部長



「S田さんが東京の青山学院高等部という学校へ行くんだって、都立の立川高校と青山の両方受かったけれど青山学院へ行くらしいよ。」情報通のM君の情報である。おそらく、これは私が青山学院という学校の名前を直接耳にした最初の記憶であると思う。1955年3月、中学3年3月の事である。北海道の帯広で生まれ育った私にとって地元以外の学校の、まして東京の学校の名前など知るはずもなかつた。

S田さんの父親は当時、帯広に本社のあつた日本甜菜製糖株式会社、地元ではニッテン呼ばれていた一流企業の社員であった。小学校高学年の時に父親の転勤に伴い東京から帯広へ転校して來たのである。父親が再び東京勤務となつた関係でS田さんは東京の青山学院高等部という学校へ進学する事になつたそうだ。M君の話である。

東京から転校して來た彼女は見るからにハイカラで、言葉遣いも上品、そして何より頭がよく、田舎者の中にあって、正に「鶴群の一鶴」、我々とは人種が違うという印象を与える、まばゆいような存在であった。あれ程、優秀なS田さんが行く青山学院という学校は余程、優秀な学校に違ひない、田舎者の中学生はすぐにそう判断した。

当時、人口5万足らずの地方都市ではどこそこのOOちゃんは勉強がよく出来るという噂は町中に広まっていた。私が高1の時、2学年上のS見さんという女子生徒も小さい時からよく勉強が出来ると近所でも評判であつ

たが、その彼女が青山学院の英文科に合格したという噂もすぐに耳に入ってきた。私が青山学院という学校の名前を耳にした二度目の事である。

そういう訳で青山学院という学校は頭のいい人の行く優秀な学校という印象が強く頭に焼き付いていたのである。

私が教師を志した時、何が何でもキリスト教主義学校の教師になりたいとの一途な思いを持っていたが、青山学院は憧れの、しかし、望むべくもない高嶺の花の学校であった。

しかし、思いもしない展開となつた。1970年4月、青山学院中等部の教師への道が開かれたのである。私がそれまで勤務していた私立高校は当時、県立の滑り止めと言っていた学校であった。忘れもしない、私がその学校を去る時、「私は今度、4月から青山学院という学校へ行くことになりました。」と言うや、教室の隅の方から一人の生徒の声が聞こえてきた。「ああ、あそこは頭のいい学校だ。俺も、青山学院に入れるようないい頭に生きて來たかったなあ。」それ程、その学校の生徒達は自分の学校と自分の能力にコンプレックスを抱えながら高校生活を送っていたのである。

さて、憧れの青山学院中等部の教師としての生活をスタートさせた。しかし、私の未熟さゆえに順調な滑り出しとはならなかつた。生徒との気持ちのすれ違いが度重なり「こんなはずではなかつた。」との気の重い日々が続いた。しかし、誠実に接していくれば必ず心

は通じるはずであると信じて自分を励ましてきた。やはり、祈りは聞かれたのだ。楽しくて仕方がない中等部生活が始まったのだ。何が楽しいのか。一言で言うと、中等部の、他人にあまり干渉しない自由で暖かい雰囲気と生徒達の人柄の良さである。生意気盛りと言われる中学生の、その生意気さも中等部生の場合、実に素直でなんとも可愛いのだ。とにかく、中等部生は実に素直で可愛い。

二年ほど前の話を二、三。「母の日礼拝」の講師として来られた作家の故・遠藤周作氏のご夫人順子さんの感想。「私は今日久しぶりに人間のいい顔を見せてもらいました。私は講演で全国各地の学校へ行くのですが、この学校の生徒さんのようないい表情を見せてもらったのは初めてです。実に穏やかな顔をしていてこの学校に満足している事がよく顔に表れています。毎日、礼拝をしている事もその理由になっているんでしょうね。」同じ頃、雑誌の取材で来られた女性ライターの感想。「実は、私も十数年前、青山学院の中等部を受験したんです。補欠になったのですが合格できなかつたので他の中高一貫の女子校に行きました。そこはそこでいい学校だったのですが、今日、取材で久しぶりに青山学院を訪れてみて、こんなにいい学校だったんですね。とにかく、生徒達が伸び伸びとしていて本当に楽しそうなんです。私もう一度受験しなおしてこの学校で学んでみたいと思ったほどです。」同行していた有名進学塾の責任者の話。「私は仕事柄、首都圏のほとんどの私学を見てきていますので、ロビーに入っただけでその学校の雰囲気はすぐに分かります。青山学院の生徒さん達は学校に心から満足している事がその表情からよく分かります。偏差値が高くてもその学校に満足していない所も結構あるんですよ。それに、キリスト教の学校といつても青山のように毎日礼拝を守っている学校はあまり多くはないんです。毎日礼拝を守っている青山学院のような学校は本当に貴重ですね。やはり、毎日の礼拝の積み重ねは大きいと思いますよ。」

ここで、卒業生に話題を転じてみよう。何年か前の学校説明会の折に聞かされた話を思い起こす。「私達、卒業生は皆、自分の子供を中等部へ入れてもらえるなら毎日、何年間でも中等部のおトイレ掃除を喜んでしたい、それ程までに子供を中等部へ入れたいと話し合っているんですよ。とにかく、楽しかった中等部生活を自分の子供達にも経験させてあげたいんです。」しかし、それ程までに中等部に恋い焦がれていたその卒業生の子供は残念な結果に終わってしまったのである。

また、中等部の教師になりたいと熱望している卒業生の何と多い事か。中等部の教師に採用してくれていたならわざわざ医学部に行かなかつた、という現・医学部教授のA君。もし、中等部でとてくれるなら今直ぐにでも会社に退職届を出して来る、と言ってはばかりない一流企業勤務のB君。青山卒で初めて採用されたと言っていた超名門企業勤務のC君は毎年のように年賀状で中等部の教師にあきはありませんか、と尋ねてくる。そして、Dさん、Eさん‥。何年後かには中等部の教師となって母校に戻って来る事を夢見ている現・中等部・高等部生の数々。「なぜそれ程までに中等部の教師になりたいのか。」と聞くと、決まって次のような答えが返ってくる。「中等部の生活が本当に楽しくて仕方がなかつたから。」「中等部の先生方を見ていると、楽しくて仕方がないというように喜々として働いているのを目の当たりに見て来たから。」

このように臆面もなく、「あばた」も「えくぼ」流に中等部の自慢話を綴っていくときりがない。しかし、「えくぼ」が「あばた」に見えてしまうなら問題であるが、「あばた」も「えくぼ」と思ってしまう事は何と幸せな事か。それ程の至福の35年の日々を与えてくれた中等部にはいくら感謝しても感謝しきれない。「中等部よ、心から有難う。中等部と青山学院の上に神の祝福が永遠にあらん事を。」

## 青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料

### その10 — 青山学院関係史料（続）—

氣賀 健生

大学名誉教授

青山学院資料センター所蔵の貴重文献・史料紹介  
第10回。今回は前回に紹介しきれなかつた青山学院  
関係史料の御案内を致しましよう。

展示ホール第二室に入ると、左側に青山学院歴代  
院長の肖像が並び、関係史料がその下にあります。  
一人一人の足跡を追いながら見てゆきましょう。

初代院長ロバート・S・マクレイ。1873年北米メソジスト監督教会派遣宣教師最初のひとりとして来日。築地の耕教学舎と、マクレイ自身も教鞭をとった横浜山手の美会神学校が合同して、1883年現在の青山の地に東京英和学校が開校し、マクレイがその初代総理（院長）に就任（1883～87在任）。マクレイは、日本の宣教は日本人の伝道者・教育者に委ねるべきである、と確信していました。その志をうけ、日本人初代院長に就任したのが、第2代院長本多庸一です（1890～1907在任）。彼の就任した1890年（明治23）は、教育勅語が発布された年で、皇室を中心とする家父長的国家主義の基礎が据えられ、キリスト教に対する攻撃の火の手が上がった時でした（参照・井上哲次郎『教育と宗教の衝突』）。更に彼の在任中1899年に出された「文部省訓令第十二号」は、キリスト教主義学校における宗教教育の事実上の禁止を内容としていましたが、断固たる建学理念に立ち比類なき政治的判断によって、青山学院のキリスト教教育を守りぬいたのが本多院長でした。東京英和学校は彼の在任中1894年に青山学院となります。彼の名言－「<sup>ねがわ</sup>希くは神の恵によりて我輩の学校よりMAN（人物）を出さしめよ。MANの資質多かるべしと雖もSincerity（真摯・誠実） Simplicity（率直）最大切なるべし」。まさに“人格”教育です。本多院長こそ青山学院に於いてキリスト教教育を“人格化・血肉化”した人物でした。

次に第3代院長小方仙之助（1907～13在任）。小方院長は温厚な人物で「聖人の如き人格者」と慕われていました。北米メソジスト監督教会宣教局に於いて、最も信頼し得る日本人として定評があつたと言われています。1913年院長を辞し、伝道に専念しました。

次に第4代高木壬太郎院長（1913～21在任）。「私は

院長たる威儀を保つことを望みませぬ。恩も威も入用ではない。入用なるものは愛のみでございます。すべての学科は人格を養ふといふことを目的として教授しなければなりません。」新学期に高木院長が教職員に語った言葉です。おおよそ高木院長が語り盡されています。青山学院の教育の中心は人格主義であり、その人格とは「神を畏れ人を愛する人物」ということがありました。マクレイから本多・小方に継承された神の前における人格主義は、高木によって思想化されたと言えましょう。高木院長は1920年に青山学院大学設立案（肖像の下の書類参照）を発表してその実現に努力しますが、病を得て急逝し、計画は頓挫しました。しかし高木の計画は約30年後に成就し、今日の青山学院大学があるのです。

次の石坂正信院長（第5代・1921～33在任）の時代は、所謂大正デモクラシーから昭和初期の経済的混乱の時代でした。殊に1923年の関東大震災では青山学院の主要な建物は全壊し、その再建のためにアメリカにまで、石坂は青山女学院のスプロールズ院長と共に募金に奔走したのでした。特に聖心病院の被災者診療のために倒壊を免れた学生寮を提供したり、デマの被害から朝鮮人を収容して救つたりしたのも石坂院長と阿部義宗中学部長の判断でした。「私の一生は青山学院だった」。石坂院長のすべてを語る言葉です。なお、彼の時代1927年に青山学院と青山女学院が合同して今日の青山学院が成立しました。

石坂院長の復興事業を軌道に乗せ完成させたのが第6代阿部義宗院長（1933～39在任）です。この時代には曾て高木院長時代に計画された大学設立案が再浮上していました。しかし阿部院長は「今は幼児にキリスト教教育を徹底させ…青山学院の主義や精神を骨髄とする人物」を育成することこそ青山学院にとつて急務であると確信し、校友会々長米山梅吉夫妻の協力を得て1937年緑岡幼稚園・小学校を発足させました。「青山学院は…愛と犠牲と奉仕に充ち満つる大家庭…」。この院長就任演説が阿部をよく語っています。1939年阿部は日本メソジスト教会監督に選

ばれて青山学院長を辞任、後任に弘前から東奥義塾長 笹森順造を迎えるました（第7代1939～43在任）。

笹森は小野派一刀流剣道の達人でしたが、彼の時代は1941年に対米戦争が始まる超非常時であり、青山学院も多事多端の時を迎え、神学部は光栄ある60年余の歴史が閉鎖され、人事異動など学内秩序の不調和に端を発した学生達のストライキなどもおこり、官憲の圧力が強くなつてゆきました。笹森院長はこの責任をとつて辞任し、理事の国沢新兵衛氏（展示ホール第一室の“功労者”に写真と解説あり）が院長事務取扱（代行）となりました。国沢院長代行は、文部省・陸軍による青山学院廃校の強圧から身を挺して母校を守つた人物として記憶されなければなりません。なお、この戦時中の学内混乱の責任は決して笹森院長ひとりに帰せられるものではなく、学内不調和の真相は今後の研究の課題であります。

第8代院長小野徳三郎（1943～45在任）。海軍中将であつた小野院長は、キリスト教徒としてよく建学の精神を守り、この超難局に当りました。“戦後史観”から「戦時青山の軍人院長」として、後年とかく誤解されがちな彼ですが、その毅然たる護教精神については、彼自身と青山学院の名誉のために敢えて銘記しておきましょう。小野院長の時代に、文科系専門部の明治学院への合併、青山学院工業専門学校開校（共に1944）、学徒出陣（1943）、学徒勤労総動員（1944）がおこなわれ、1945年5月25日の空襲によって青山キャンパスの主要建物は消失し、そして敗戦の日を迎えたのでした。

第9代豊田実院長（1946～55在任）の時代は戦後青山学院再興の時代であり、新学制による中等部、高等部、短大などが次々に発足し、1949年には大学が開校しました。大学院が設置され、東京農大の敷地約6,600坪を購入し、学校法人青山学院が成立したのもこの時代です。

第10代古坂嵩城院長（1956～59在任）は前任者の発展を受け継ぎ、校地を約3,000坪拡大し、1959年には創立85周年を盛大に記念しました。

次が第11代大木金次郎院長（1960～89在任）です。約30年に及ぶ彼の時代には青山学院大学が大きく発展し、実にさまざまなことがおこりました。1965年に理工学部が開設され、1964年には創立90周年式典が行われ、「青山学院教育方針」が制定されました。正門脇に高層の研究室棟が建ち、その傍らにジョン・ウェスレーの像がこのキャンパスに学ぶ学生達を慈愛深く見守っています。1968年暮から始まった大学紛争は青山学院にとっても大きな試練でした。1977年には伝統ある神学科が廃止されました。前回の閉鎖は戦時中の外圧によるものでしたが、今回は自らの意志による大木院長の判断でした。青山学院建学の理念を如何に回復するか、大きな課題が残されています。厚木キャンパス開学（1982年）もこの時代です。

さて、こうして歴代院長とその足跡及び時代を御紹介してきましたが、これらの肖像の下に展示されている史料、特に1925年の教員免許状、1943年の中学部卒業記念アルバムに注目しましょう。戦前戦中の空気が実によく表れています。第二室には青山学院の歴史を語るビデオが常設されています。その周辺の壁面には青山学院の歴史を示す諸施設の写真が並んでいます。また戦時中の青山学院を語る、いわば“負”的歴史が裏側の壁面にあります。青山学院の戦災跡、学徒出陣の写真及び出陣学徒を送る配属将校大井公平氏のそらぞらしい大言壯語の壮行の辞、そしてサインいっぱいの日章旗。ここには痛ましい戦争の傷跡が残されています。



## インマヌエル高津キリスト教会

善如寺 亜矢

宗教センター事務室 嘱託

渋谷駅から東急田園都市線に乗り、二子玉川を過ぎて電車が高津駅のホームに入ると、右手に白い十字架が、棟を並べ、甍を争う家々の間から見えます。これが私の所属している教会、インマヌエル高津キリスト教会です。

牧師の藤本満先生は、大学で兼任講師としてキリスト教概論を教えておられます。そのため日曜日の礼拝には、授業を受けた学生さんがときどき足を運ばれます。私もかつてはそんな学生の一人で、緊張しながら初めて教会の門を叩いた時のことを懐かしく思います。現在私は本部宗教センターで事務嘱託として働かせて頂いておりますが、それも神さまの不思議なお導きと思っています。

この教会は、イムマヌエル綜合伝道団に属しています。教団の創設者である薦田二雄先生は、ホーリネスの流れで戦中に奉仕し、弾圧によって東京拘置所に2年半投獄されました。当時さまざまな問題を抱えていたホーリネスから袂を分かち、新しくウェスレーの信仰に立ち戻って群れを結成することを獄中で決意されました。現在、全国に125の教会があり、海外6カ国に宣教師を派遣しています。

高津教会は、敗戦後まもない1947年に創立されました。日本橋から高津に疎開して、勝間田木工所が家庭集会をして伝道をしていました。木工所の勝間田忠氏が、私財を投げ打つて素敵な塔のついた昔の会堂を建てられました。極上の木材が使われていたそうです。現在の会堂は30年前に建てられ、その後増改築を経て、二階席やバリアフリーのトイレを設置し、床暖房も整備されました。先日も電気・塗装関係の仕事に就く教会員の手によって、会堂の天井に新しい照明が設置され、以前よりもいつそう明るく優しい雰囲気の会堂になりました。

講壇には毎日曜日、フラワーアレンジメントの講師をしている教会員によって、季節の花々を使った素敵な作品が飾られます。また音楽活動も盛んで、ピアノ、ヴァイオリン、ホルン、トランペット、ハンドベルなど様々な楽器での讃美も行われます。中でも聖歌隊は少人数ながら熱心な活動を続けており、二ヶ月に一度は奉唱の機会を与えられています。

教会員一人一人がその与えられたタレントを活かして奉仕をしており、愛され大切にされている教会です。また赤ちゃんからご高齢の方まで、どの世代も偏ることなく会員がいるというのも、高津教会の素晴らしい特徴です。

お近くにいらした際は、是非お立ち寄りください。礼拝はもちろん、日曜日の午後には教会員が証しする集会やコンサート、身近な問題を取り上げた講演会なども行われます。とはいへ訪ねるのはちょっと……という方は、ぜひ高津教会ホームページまでお立ち寄りください。教会の雰囲気がとてもよく表れていると思います。

高津教会ホームページ  
<http://www.tkchurch.com>



# 宗教センターだより

## 幼稚園 より

今年度も3学期を終了しようとしています。

日々、好きな遊びを見つけ、取り組み、友だちと出会い、力を合わせ、時に意見がぶつかって葛藤を覚え、それを乗り越えて仲間となり…。子どもたちは心と身体をいっぱいに使って様々な経験をし、3学期にはそれぞれに「大きくなつたなあ」と感じられる場面がたくさんありました。特に年長児は3年間の集大成、遊びの内容はより深まり、卒園制作では木製の2段ベッドを協力して作りました。3月14日の卒園式の日には、深町園長先生から一人ひとりに卒園証書が手渡されます。

1年間、私たちを守り導き、成長させてくださった神様に感謝します。そして新年度、進級・入園してくれる子どもたちとの新しい出会いに向けて、また必要な準備を心を込めて行つていきたいと思います。

(教諭 久 洋子)

## 初等部 より

毎年、信州黒姫で行われる「雪の学校」は、例年なく雪が多く、充実した時を過ごしました。神さまの不思議な御業を感じます。

初等部のキリスト教関係の行事をお知らせします。  
**宗教委員退修会**

2月10(木)～11日(金)

宗教委員の先生方が、初等部キリスト教教育の一年を反省し、新たな年度の計画を立てる大切な会です。

## 卒業礼拝

3月4日(金)

この年卒業を迎える6年生と共に守る礼拝です。6年間、毎日礼拝を守った礼拝堂で、心を込めてさげます。説教者は、小澤淳一宗教主任。

## 6年生を送る礼拝

3月7日(月)

6年生から、それぞれの学年に御言葉と「友情の火」と呼ばれるろうそくの光をおくり、各学年が御言葉で答える礼拝。これで、在校生とのお別れをします。

奨励者は、小林 寛先生。

## CCWAフィリピン訪問プログラム

3月22日(火)～27日(日)の6日間、フィリピンのルソン島のマニラ、パナイ島のイロイロ、ギマラス島の3つの島に住む里子の家庭を訪問します。参加者は、5年生児童6名。引率者は、宗教主任の小澤淳一先生と教諭の古閑ひかり先生。なお、このプログラムは、昨年より大学と合同して行っています。

(宗教主任 小澤 淳一)

## 中等部 より

## 献金

中等部では、クリスマスに生徒、教職員、保護者で心を合わせて献金を捧げ、34の諸団体にお送りしました。海外の医療、教育にあたっている5団体、国内の5つの学校と神学校、そして24の施設（児童、老人、障害、心のケア等）です。これには、秋の中等部祭でのバザーの売上げ、毎月の保護者聖書の集いの折りに寄せられる献金も加えられています。

その他、クリスマス献金とは別に、毎月一回友情献金をH・Rと教員室で捧げていますが、これは別にまとめて、CCWA（国際精神里親運動）、JOC-S（キリスト教海外医療協力会）、友情献金基金の3つにお送りしています。

これ以外に今年は、自然災害により困難な状況になられた方々のために特別に呼び掛けて、献金を集め、お送りしました。

中越地震災害支援－169,514円（11月）

スマトラ沖地震・津波災害支援－440,137円（1月）

## CF活動

1月22日（土）に清瀬市の救世軍特養ホーム「恵泉ホーム」を訪問しました。ハンドベル部員4人箇曲部員5人で、入居者の皆様と新年のミニコンサートを楽しみました。

## 卒業礼拝

3月14日の卒業礼拝には、中等部6期生の田坂興亞先生（アジア学院院長）をお招きし、お話を伺います。中3の生徒にとって、中等部での最後の礼拝になります。

(宗教主任 石丸 泰樹)

## 高等部 より

## クリスマス礼拝

高等部では12月17日にクリスマス礼拝を行いました。第1部の礼拝では、深町正信院長が『宇宙からのクリスマスメッセージ』と題して感銘深いお話をして下さいました。

第2部の祝会は、生徒自身によるキリスト降誕の祝いとして、5グループによるクリスマス曲の演奏、又A B F（聖書同好会）によるクリスマスページェントが行われました。

## クリスマス献金

クリスマス礼拝の中で、各クラス代表によってクリスマス献金が捧げられました。生徒、保護者（保護者聖書の集い出席者含む）、教職員、同窓会の方々によって捧げられた献金合計は、1,429,589円でした。

アジアキリスト教教育基金（ACEF）、国際精神里親運動部（CCWA）、新潟中越地震被災者他、20の団体と卒業生伝道者14名に贈ることができました。

(宗教主任 坂上 三男)

# 宗教センターだより

短大  
より

## 卒業礼拝

3月22日 火曜日  
13:30~14:30  
青山学院講堂

## 宗教活動委員会 送別会

3月22日 火曜日  
15:30~  
女子短期大学音楽堂  
(宗教活動委員 湯本 久美子)

大学  
より

## 2004年度クリスマス献金

多くの方々からクリスマス献金が寄せられました。次のように報告させていただきます。

献金総額：1,162,153円  
献金先：  
・いのちの電話 290,000円  
・ペシャワール会 292,153円  
・アジア保健研修所 290,000円  
・新潟県中越地震災害被災者のために  
(日本赤十字社を通じて)  
290,000円

## 第二部スプリング・カレッジ

第二部の学生を対象に次のように行われました。  
期日：2005年2月5日（土）～6日（日）  
場所：YMCA 御殿場 東山荘  
講師：野村 祐之氏（本学非常勤講師）  
参加者：学生21名 スタッフ10名

## 大学卒業礼拝

次のように行われます。  
期日：2005年3月26日（土）  
場所：ガウチャー記念礼拝堂  
説教：東方 敬信 宗教部長  
(宗教センター事務室 田中 健夫)

本部  
より

昨年は国内外に大きな災害があり、多くの人命が失われました。またその何倍の方が家をなくし、怪我をする等の困難な状況にあり、特にスマトラ島での大津波は今までの経験からは予見できないことが、大きな被害をもたらしたと報じられています。

## 編集後記

再び春が巡ってこようとしています。今年も沢山の園児・児童・生徒・学生そして院生が青山から新しい世界へ旅立ちます。それぞれが自分の夢を実現できますように心より願っております。何卒、お導きをしてお守りくださいますようお祈りいたします。

女子短期大学 宗教活動委員 湯本 久美子

世界中には人間には想像できない大きな神様からの試練がありますが、これを人間が今までしてきた「悪い行為」に対する報いと考えるか「忠告」と理解するか、人により考えが異なるかもしれません。しかし、人間が今まで行なってきた「精神的習慣」を省みる必要に迫まられていることは確かではないでしょうか。

学院に関係する多くの方々から心温まる義援金が寄せられたことにあらためて感謝いたします。

(宗教センター事務室 田中 健夫)

## ジョン・ウェスレーをめぐって（その3）

### 「生涯最大の汚点」

ジョンとチャーレズの兄弟が、当時はまだイギリスの植民地だったジョージアでの伝道に従事したのは、1736年から翌年にかけての一年余である。しかし残念なことに、まだ若く、情熱には溢れていても現地の事情に疎い二人のこの企ては、全くの失敗に終わってしまった。

中でも致命的だったのは、ジョンが好意を抱いたソフィア・ホブキーなる女性との関係である。彼女は結局別の男性と結婚するのだが、そのことを根に持ったのであろうか、ジョンは教会規則を厳格に適用して彼女を陪餐停止の処分とし、その夫から名誉毀損で訴えられるに至るのである。

これが彼の生涯最大の汚点となつたことは疑い得ない。しかし、アメリカ行きによってモラビア派との出会いが起り、それが彼の回心体験に結び付くのだから、神のなさることは奇にして妙、と言う他ないであろう。

(H・H)

## No.82号 お詫びと訂正

- ・P. 9 写真説明文  
前列左端 → 前列向かって右端
  - ・P.13 ブラウン先生のお名前の下  
経済学部 → 経営学部
- 関係の皆様に深くお詫び申しあげます。

## Wesley Hall News 第83号

発行 青山学院宗教センター 宗教部長 東方敬信  
東京都渋谷区渋谷4-4-25  
TEL.03-3409-6537(ダイヤルイン)  
URL:<http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>  
E-mail:agcac@jm.aoyama.ac.jp

編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会  
印刷 万全社